

企画展 **田んぼ** 埼玉、人と水の風景 2017.3.17(土) >>> 5.6(日)

埼玉県には、低湿地・台地・丘陵地・山地など、起伏に富んだ様々な地形があります。それらは必ずしも水田に適した土地ばかりではなく、それぞれの環境に即した田んぼの形式や農耕技術が発達しました。また、田んぼは単に収穫の場所であるだけではなく、祭り行事の場でもありました。この展覧会では、農具を中心とした県内各地の民俗資料や考古資料、絵図など様々な資料を通して、埼玉の田んぼを見つめます。



苗運び（昭和43年）



苗運び（平成29年）

稲作の1年は、田うない（田起こし）に始まり、種蒔き、代掻き、田植えて怒涛の春が過ぎていきます。夏は水の管理と草取りをしながら、稲の生長を見守り、秋に総出で稲刈・^{もみすり}籾摺します。農具をじっくり観察してみると、生産力を高め効率化を図ろうとする農業者の工夫と思い入れが伝わってきます。本展では、昭和58年に指定された国

指定重要有形民俗文化財「北武蔵の農具」（当館蔵）を中心に、機械化の進んだ現代農業と比べながら、稲作の1年を追いかけます。

県内には様々な田んぼが分布し、農具も地域によって違いがありました。例えば、用水路が昭和30～40年代に整備されるまで、田んぼの灌漑は必ずしも容易ではありませんでした。水を抜くことが難しい低湿地では、泥を掘り上げて田んぼと水路を作る、^{ほりあげた}掘上田が広がっていました。水を引き込むことが難しい台地では、^{てんすいでん}天水田が作られ、種を直接植える^{つみた}摘田という農法が行われていました。その独特の農具は、国登録有形文化財「^{あげお}上尾の摘田・畑作用具」（上尾市教育委員会蔵）に見ることができます。また、埼玉の田んぼでは、米だけではなくクワイやレンコンなどの作物も生産されてきました。バラエティーに富んだ埼玉の田んぼ事情を、農具を通して紹介します。

このほか、記念講演会や歴史民俗講座をはじめ、民俗芸能公演や民俗工芸実演などたくさんのイベントを予定しています。田んぼで働いている方も、あまり田んぼや稲作を知らないという方も、ぜひ埼玉に広がる人と水の風景に触れてみてください！



御田植祭（秩父神社・平成29年）

（展示担当 戸邊優美）

民俗展示室のリニューアル、来たる！ —海なし県「埼玉」の水とくらし—

当館を訪れたことがある方は、常設展示室の中の民俗展示室について覚えていらっしゃるでしょうか。当館の常設展示室は、原始に始まり、古代、中世、古美術、近世、近現代と通史的に埼玉県の歴史を紹介しています。近現代展示室の後、常設展示室の最後に登場するのが民俗展示室です。

民俗展示室は、生活のための道具を展示し、県内各地域の生活の違いやその変化について感じていただく空間です。展示資料には、現在では用途や使用方法について予想がつかない道具から、地域や家庭によっては現在も使用されている道具が登場します。「ちょっと昔」から現在に至るまでの日常にある身近な歴史や生活文化を学んでいただくのが民俗展示室の目標なのです。

さて、この民俗展示室は、3年に1回、全面的な展示替えをしています。もちろん、他の常設展示室でも、資料保存の必要や季節の話題にあわせて定期的に展示替えが行われていますが、民俗展示室の場合は、展示室のテーマさえ変えてしまう、全面的な展示替え（リニューアル）を行います。

今年度はそのリニューアルの年です。2月10日からは新しく「水とくらし」をテーマにした展示に生まれ変わる予定です。ここでは、新しい民俗展示で取り上げる「水にまつわる民俗」のなかでも、河川や湖沼で行われる漁業について簡単にご紹介したいと思います。

海岸線を持たない内陸県、いわゆる「海なし県」埼玉において、「水」と言えば荒川や利根川といった河川、湖や沼等が想起されます。少し意外なところでは、水田や農業用水を流す用排水路も身近な「水」の1つでした。県内では、これらの淡水において漁業が行われてきました。

漁業というと網漁や釣り漁がお馴染みの漁法ですが、今回のリニューアルで特に注目する道具の1つが「うけ 筥らうと」です。筥というのは、割竹や竹ひご等で作った漏斗状、もしくは筒状の道具で、河川や湖沼、水田やその用排水路等に仕掛け、魚をおびき寄せ捕獲する道具を言います。釣漁・網漁が積極的に魚に働きかけて捕獲する道具であり、漁獲が個人の技能に左右される度合いが高いのに対し、筥漁は仕掛けて待つタイプの漁法と言えるでしょう。そのため、対象とする魚や仕掛ける場所の環境が筥の形状に大きな影響を与えます。



写真1 水田や用排水路に仕掛けドジョウを獲る筥

例えば、捕獲の対象とするのが、ウナギなのかドジョウなのかエビなのかコイなのかによって、筥の大きさや作り方が変わってきます。逃げられやすいウナギを捕獲する筥は、カエシと呼ばれるV字状の仕掛けが2つついています。他方で、荒川上流域で使用されるヤマメ用の筥には、カエシがついていません。これは、上流域の激しい川の流れによってヤマメは筥から逃げられないので、カエシをつける必要がないためとされています。

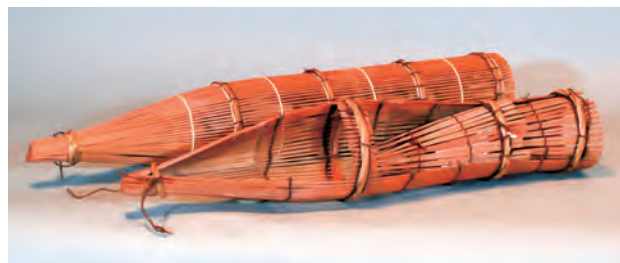


写真2 ウナギウケ（手前は筥内部の解説用に製作されたもの）

このように、人々の魚に関する知識や経験が反映されているのが、筥の特徴です。当館には、各地域で使用されていた筥が多く収蔵されているので、リニューアルの際には様々な形状の筥をご紹介したいと思います。道具としての面白さもさることながら、精巧に編まれた筥は、日用のために生み出された道具の美しさを感じられます。

他にも県内の水に関する産業や行事・祭りに関係する資料を展示し、埼玉の人々の「水との付き合い方」について知っていただけるよう、現在、展示準備中です。リニューアル後にはぜひ、民俗展示室へ足をお運びください。

（展示担当：後藤知美）